

虹をわたるクロフカ

月之宮
成子

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します

クロフカは、年老いた犬だった。

もうこの先そう長くはない、誰よりも彼自身がそれを知っていた。

数日前から、自分の周りにどこかしらチラチラと光が飛び交い、ともすると自分の体全体が光に包まれたように見えるのだった。

その光はあたかもシャボン玉のようにゆらゆらと漂っては、ふわーつと消えてゆく。また、その動きはどこか導かれるように輝きながら、離れては戻り、また離れては戻りするのであった。

もう高齢のため瞳は白濁してあまりモノはよく見えないのだが、この光はまた別のようにだった。

ライラックの茂みの下で、雨上がりの風を感じながら、とろけるような薄ぼやけた空を眺めていると、この家に来た頃のことを思い出された。

かれこれ十数年前にもなるだろうか。

若い頃のクロフカは「もう子犬ではない」というだけの理由で、見知らぬこの土地に置き去りにされた。

—

春の陽射しがやわらかな明るい午後、河川敷の堤防沿いの道で、ジープ型の車は止まった。

車のドアが開くと、一人の人間と一匹の犬が降りてきた。

フサフサとした尻尾を思いきり振りながら飼い主の周囲を飛び跳ねるその犬は、姿は大きい、まだあどけなさが残る子供犬である。

河川敷はヨシキリやヒバリがさえざり、自生した菜の花が咲き乱れ、どこまでも続く黄色いじゅうたんのようだった。

犬を連れて飼い主は、しばらく土手を歩くと、やがて犬の首輪からリードを外した。

犬は一瞬飼い主を見たが、うれしそうに飛び跳ねた。

「ええ？ いいんですか？ ここで走ってもいいの？ 綱無し散歩してもいいの？ ……嬉しいな！ 嬉しいな！」

犬は辺りをぴよんぴよん跳び回り、飼い主にまとわりついた。

普段、小さな犬小屋と狭いケージの中にいるこの犬にとって、今日のこの自由さはたとえようもない幸せだった。

飼い主は、もう一方の手にわしづかみにして持っていた、封の開いているドッグフードの袋を荒っぽく逆さにすると、中身をザラザラと足元に盛り上げた。

「わあ…：おやつだ！ すごいや、今日はピクニックなんだね！」

犬は一口二口ほおぼると、また跳ね回った。

「でも、坊ちゃんも誰も来てませんね」

飼い主は、空になったドッグフードの袋を無造作にその場に投げ捨て、その代わりに足元にあった二十センチほどの棒切れを拾うと、それを犬に見せてから、花の咲く河川敷に向かって放り投げた。

棒は緩やかな弧を描いて菜の花の海に埋もれた。

犬は棒を追って飛ぶようにして土手を駆け下り、正確に棒の弧の後を同じように黄色い花の海に飛び込んだ。

やがて、投げられた棒を銜えた犬は、花の海から姿を現すと、嬉々として土手を駆け上がり、飼い主の足元にポトリと落として正座をし、次の指示を待った。飼い主を見上げる犬の鼻先や睫毛、耳には黄色い花粉

がついている。

何度かそのゲームを繰り返すと、今度は飼い主は棒を思いきり遠くに投げた。

その棒の飛んでいった距離のあまりの遠さに、後を追ったほうが良いものかと犬も躊躇するほどだったが、飼い主の顔を見て「行け」と言う指令が出たのを確認すると、再び土手を駆け下りた。

棒は再び黄色い花の海に埋もれ、追ってきた犬も前と同様にその波に飛び込んだ。

と、そのときだった。

背後で車のドアの閉まる音がした。

棒を銜えた犬は、はっとして立ち上がり、土手の上を見上げた。

車のエンジンがかかった。

犬は慌てて銜えていた棒を放り出すと、一目散に土手を駆け上がり、車に駆け寄った。

がしかし、犬が走り出すのと同様くらいにエンジン音のうなりを上げ、車は勢いよく走り出した。

「 待って！ 待って！ 僕ここだよ！ まだ乗ってないよお！ 」

車の後を犬は必死になって走り出した。

「 待って！ 待ってえ……！ 」

後には、車が踏み潰したドッグフードの空き袋と、そして山盛りになった犬の好物が残された。それも半分は、車の轍に無残につぶされていた。

日暮れが近くなっていた。

ジープ型のその車は、愛犬であったはずの飼い犬が必死に後を追いつながら飼い主を呼ぶその声にも、止まることなく走り去った。

川沿いの一本道、走り去った車の轍を何処までも何処までもその若い

犬は追いつけた。

やがて、大きな十字路をいくつか越えて、とうとう飼い主の匂いも車の気配も分からなくなってしまった。

つづく